

NPO法人モモンガくらの危機管理の考え方

1. 基本

- ア) 想定される危険を予知し、そのための対策を徹底的に講じる。
- イ) 万が一の時を想定して対策を講じるとともに、スタッフに対する教育を徹底して行う。
- ウ) 参加者には自分の身の安全は自分で守ることを徹底する。(ただし、参加者が未成年者である場合、保護者に活動の主旨、内容等を伝え、理解した上で参加してもらうこと。)

2. 危険因子の分類

自然とのふれあい活動は、非日常的な自然環境の中で行われるものです。従って日常的に予想される危険とは異なることがかなり多くあります。指導者はまずこの点をきちんと認識した上で活動を行うこと。

(1) 自然環境の危険因子

- ア) 気象によるもの(大雨、洪水、吹雪、なだれ、強風、台風、落雷等。)
- イ) 地震によるもの(山崩れ、津波、山火事等。)
- ウ) 人体に影響を及ぼす危険な動植物(毒蛇、ハチ、ケムシ、ウルシ等。)

(2) 生物的な危険因子

- ア) 病気 伝染性病原体や寄生性病原による疾病、食中毒、アレルギー、その他の疾病。
- イ) けが すべる、転ぶ、ぶつかる、落ちること等によるけが。

(3) 社会性、文化性、人為的な危険因子

- ア) 人間関係によるもの 人間関係のこじれ、いじめ等による精神的・身体的な危険。
- イ) 文明の利器によるもの 刃物や火、或いは道具の扱い方の失敗によるけが、交通事故。
- ウ) 主催側、指導側の過失による危険 無理な計画、未熟な指導者による事故等。

この他にもまだまだあるとは思いますが、少なくとも前述したようなポイントで活動を実施する日程、場所、内容、対象者の状況等を予測して、どのような危険があるのかを確認することが必要です。

想定できるかぎりのあらゆる危険を予測すること大切です。そしてそれらの危険をいかに回避するか対策を立てることが重要です。

危険予知と危険回避行動こそが安全管理の全てと言っても過言ではありません。しかし、これらの能力は決して書物を読んだから身に付くというものではありません。実践での経験を積むことが大変重要です。

川のリスクマネジメント

川遊びが可能かどうかの判断基準（活動河川選択）

1. 参加者のレベル

- ① 未就園児以下レベル
- ② 未就園児～就学前レベル
- ③ 小学1年～小学4年生レベル
- ④ 小学5年生から中学1年レベル
- ⑤ 中学2年～高校生レベル
- ⑥ 上記以上～50歳代レベル
- ⑦ 60歳以上レベル
- ⑧ 障がい者レベル

2. 川の状態

- ① 流れ
- ② 深さ
- ③ 川幅の
- ④ 上流の状況
- ⑤ 下流の状況
- ⑥ 漂流物の状況

3. 天候による変化（いつもと違う状況）

- ① 前日以前の降雨による増水
この際、川水の濁り、漂流物などを見て判断できることもある。
- ② 開催当日も雨が降り続けている
- ③ 開催中の天候変化による突然の降雨、落雷
※事前に天気予報を把握し、十分な対策をする。

4. その他、状況によりもっとも安全と思われることを判断し実行する。